

# 市史の小径

第29回

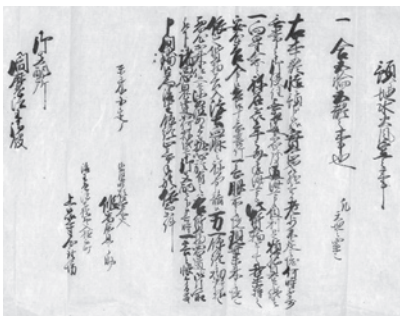
## 閻魔様あての借用証文

# 江

戸時代、広く金銀等の貸借が行われていたことは、古文書調査の際に借用証文が多数含まれることから分かります。普通は人間から借りますが、中には「閻魔様」から借りるという面白い事例があります。

「預り地水火風空之事」と題された閻魔様への証文、借用証文の形式に沿って、次のように記されています。

「五輪五體（心と体）を預かるが、老少の別に関わらず返済する。利足として発生する煩悩は念仏を唱えて毎年返済し、質物として浄土往生を願う心を差し入れる。臨終の際、現世に執心するようなら悪鬼に支配されたとしても恨まない」。この証文の差出は「婆娑町煩惱東へ



閻魔様あての借用証文

入」と「後生道浄土西へ入極楽町の2名、日付は「未来不定」（いつになるか分からない）とあります。もちろんこれはフィクションですが、人の世を茶化すためだけに書かれたというより、仏教の教えについてかなり正確な知識を持つ人の手になるものようです。おそらく、人生を人と閻魔様との貸借関係に見立て、人々の興味を引くように工夫された、民衆教化のテキストだったの

でしょう。そうだとすれば、江戸時代とは、借用証文の形式に、当時共有されていた仏教思想を掛け合わせることで、人々の笑いを誘いつつしっかり教えを伝えられた社会であったと考えられ、庶民の常識や心を知るところで、借用証文は普通「為後証」（後の証拠とするため）という言葉で締めくくりますが、閻魔様あての証文では「為後生」（来世のため）と字があてられています。先ほどの住所表記と合わせ、最後まで江戸時代の人によるしゃれた表現におかしみを感じます。

◎市史第一巻「古代の甲賀」  
ただいま発売中

購入・問い合わせ

歴史文化財課

市史編さん室

（甲南庁舎3階）

☎86-8075 FAX86-8216

## みんなの窓

### レットルに傷つけられない社会に

ウィミックという小さな木彫りのこびとたちがいました。毎日こびとたちは朝から晩までシールの貼りあいっこに夢中。きれいな者、才能のある者には金びかのシール、見栄えが悪くてぶきつちな者には灰色のダメシール。パンチネロは、なんのとりえもないこびとでした。やることなすことへまばかりで体中にダメシールを貼られて、すっかり自信をなくしてしまいます。「どうせぼくはだめなウィミックさ。」

そんなある日、不思議な少女ルシアに出会います。ルシアにはどんなシールもくっつきません。「ぼくもあんなふうになれるといいなあ。」

レットルに踊らされレットルに傷つけられる生活をしているのはウィミックたちだけではなく、わたしたちの社会もまさにそのものかもしれません。そのままの自分こそ尊いのに、まわりの人から、社会から、勝手に貼られたレットルに傷つけられることは、個人の不幸だけではなく、みんなが生きにくい世の中にするのでしょうか。

そんなことの片棒を担ぐのは、もうやめにしましょう。

男である、女である、〇〇人である、□□出身である、障がいがある、ない、やせている、太っている、どんな顔をしている等は、すべてその人の個性をつくるものです。その人を他にはいないたったひとり人間として力をもたせるものです。私たちは、ただもう自分が自分であるというだけで、十分にたいした人間なのです。

シールの貼り合いなんて、「あんなの変だよ。」パンチネロは、ルシアが教えてくれた彫刻家エリに会いに行きます。エリは、ウィミックたちを創った人でした。

さてエリは、パンチネロをきれいなこびとに作り替えてくれたでしょうか？いいえ、そんなことはしません。シールに振り回されない生き方のヒントをくれるのです。

「おまえは大切なんだ、それから わたしは失敗しないよ」と。

（参考：絵本「たいせつなきみ」

M・ルケード作 いのちのことば社）

問い合わせ 人権推進課 ☎65-0693 FAX 63-4582